電力や再生可能エネルギーで

社会基盤を支えるプロの技術者に

東京 2020 大会のボランティアを経験
満ち足りた 4 年間の先は思い募らせた企業へ就職

落ち着きある温和な雰囲気の持ち主でありながら、大学生活の 4 年間を多方面でアクティブに過ごしてきた S さん。環境教育学科での学び、東京 2020 オリンピック・パラリンピックのボランティア参加、自身のキャリアデザインなどについて聞きました。

◎大学での学修

真摯に課題と向き合い 3 年連続特待生

高校では生物部に所属、環境問題やエネルギー問題に興味があったことから環境教育学科へ入学した S さん。大学の授業は「環境衛生学実験」がもっとも記憶に残っているそうで、「自宅のお風呂場や鏡から採取した微生物を培養して、どんな微生物なのかを突き止める実験内容でした。わたしたちの日常生活と微生物が密接に関わっていることが新鮮で、この授業を受けてからは、この食品は発酵食品だからどんな微生物が関係しているんだろうというように視野が広がっていくのも面白かったです」

このような実験・実習が多いカリキュラムであるところが特長の環境教育学科ですが、「文理融合であることもこの学科を選んだ理由でした。環境の理系と教育の文系、双方から学べる学科なので、将来の進路を絞らずに柔軟な選択肢を持って考えることができる点がわたしには合っていました」

Ｓさんは大学2～4年生の3年連続で在学生特待生を受賞。学修面でどのように臨んできたのかを聞いたところ、「出された課題に真摯に向き合い、課題の意味や目的を正しく理解することを大事にしてきました。自分がそれらを十分に理解できていない場合には、先生にお聞きし確かめてから課題に取り掛かりました。また、図書館で課題の周辺情報を調べることにも多くの時間を費やしました」と振り返ります。課題の意味や目的をクリアにすることでやるべきことが順序立てて整理され、より幅広い情報を収集したり自分なりの考察を深めたり、課題に取り組むパワーが満ち溢れてきます。大学で求められる自主的な学びの根本をＳ　さんの言葉は教えてくれているのではないでしょうか。

◎学内の課外活動

学生 CRED、ボランティア、サークル

Ｓ　さんは課外活動も充実した色濃い4年間を送りました。大学1年生から「学生 CRED」という学生が中心となって『新入生歓迎交流会』や『学生と教職員の交流会』など様々なイベントを企画し運営する活動に参加。大学 2 年生の時には同種団体で活動する学生が全国から集まる学生 FD サミットに参加するため北海道まで足を運びました。「自分たちの大学生活をどう捉え、どう変えていきたいか、そのために何をすればいいかを話し合いました。そこで知った他大学の取り組みは家政大とは全く異なりとても新鮮でした。その後に学生 CRED 主催で実施した学生アンケート企画は、学生 FD サミットで得た情報を参考にアレンジして想起した活動です」

学生 CRED の活動以外にも、大学1・2年生で所属していた学内公認サークル「ライフサイエンス研究会」では工場見学を重ね、サイエンス分野への好奇心をフルに満たしたＳ　さん。さらに、ヒューマンライフ支援センター（Hulip）が実施するボランティアにも積極的に参加し、高齢者向けフレイル(*)測定のボランティアが特に印象的だったと言います。「このボランティアで初めてフレイルという言葉を知りました。これが今執筆している健康がテーマである卒業論文にも通じる概念で、何事もいつかどこかで繋がるものなんですね」

ひとつの活動から得られる体験や知識、そしてそれを起点としてさらに広がる好奇心。きっかけの種は至る所にあり、その種を掴んで経験を刈り取ること。学生生活が秘める成長の可能性はまさに無限、Ｓ　さんが歩みを進めてきた道にはそう思わせてくれる確かな足跡を見ることができます。

(*)「フレイル」とは日本老年医学会が提唱した用語で“加齢に伴う予備能力低下のためストレスに対する回復力が低下した状態”のこと

◎東京 2020 オリンピック・パラリンピック

IOC 委員のアテンドを担う大役も

2021 年に開催された東京 2020 オリンピック・パラリンピック、S　さんは開催前の準備を担うパイオニアボランティア、大会期間中に活動する大会ボランティアとして参加する機会に恵まれました。前者の活動では組織委員会の国際局で大会ボランティアが活動中に持ち歩くマニュアル作成に携わりました。後者の活動ではオリンピック期間中はアフガニスタンの IOC 委員のアテンドを担当。会場までの移動手配や観戦席への案内が役目でした。「わたしのアテンドにミスがあれば IOC 委員が会場に到着できない事態を招くなど責任ある仕事で、そのうえ全て英語での会話だったので必死でした」と当時の緊張感を語ります。かたやパラリンピックではアテンドスタッフをまとめるリーダー役を務めました。「アテンドスタッフがそれぞれの場所で足りているのか、車の手配が合っているかなどを確認するなどのコーディネートを本部で行いました。他のボランティアスタッフと交流できる時間もあり、社会人が多く参加していましたので普段の仕事についてなど色々な話を聞くことができました。アクティブな方に囲まれて刺激を受けました」と東京 2020 大会のボランティアは S　さんに人との出会いも引き起こし、またひとつ世界を広げてくれました。

◎就職活動

1 年生夏からインターンに積極参加

大学入学当初から、人々が安心して幸せな暮らしを送れるように社会生活の基盤を支える仕事をキャリアプランとして思い描き、公務員と民間企業の両方を視野に入れて考えてきました。そして、S　さんは早期からそれらの職場を見ることができるインターンシップを活用、大学 1 年生の夏に内閣人事局主催「女子学生霞が関インターンシップ」へ参加、「1 年生でインターンに参加するのは早すぎるのかもしれないと迷いもありましたが、キャリア支援課の方に背中を押してもらって応募しました。農林水産省、特許庁、内閣府をまわりました。他の参加者は上級生が大半で、就活の話を聞くなど参考になりました」

続けて 1 年生の冬には民間会社のインターンにも複数参加、そこで出会った東電タウンプランニング株式会社（以下、東電タウンプランニング）がその 3 年後には S　さんの就職内定先となります。インターンで初めてこの会社を知ったという S　さん、インターン中には既に将来この会社で働きたいと思ったと言います。「社会基盤を支えるという自分の将来イメージと東電タウンプランニングのまちづくりに貢献する事業が同じ方向性であることと、高校のときに砂漠化を研究したことで関心を持った気候変動やエネルギー問題に資す

る再生可能エネルギーを扱っていることに心が動きました」さらに、インターンシップに参加したからこそ知ることができた企業の魅力も教えてくれました。「働いている社員の方々と話すと自分の仕事に誇りを持っていることがひしひしと伝わってきました。また、技術職が使う専用ソフトを操作する際には丁寧に教えてくださったり、社員の方が自分で電柱の配電設計をした地域一帯の写真を見せてくれた時の誇らしい表情だったり、それらに触れてこの会社で働きたいとの思いが募りました」

就職活動では東電タウンプランニングに照準を絞って活動し、大学 3 年生の 3 月には内々定の通知を手にすることができました。面接等の自己 PR では「学生 CRED では同世代と一緒に活動、東京 2020 大会のボランティアでは年上の方と協働した経験を踏まえ、色々な属性や幅広い年齢層の方とも円滑なコミュニケーションができますとアピールしました」と少し気恥ずかしそうに教えてくれました。

◎卒業後の将来

技術職を極め、再生可能エネルギーも

就職先では電柱の配電設計を担う技術職として働くことが決まっています。「まずは配電設計の道を極めていきたいです。将来的には再生可能エネルギーに関する仕事にも携わってみたく、そのためには設計のプロフェッショナルにならないといけません。当面の目標は一人前の技術者になることです」

そして少し遠い未来の 10 年後の自分を S　さんはどうイメージしているのでしょうか？「バリバリ働いていると思います。今後スマートシティ化が進めば、安定的で最適化された電力の供給が求められます。仕事を通じて人びとが安心して暮らせる安全なまちづくりを実現させることが目標です」

環境教育学科で習得した専門知識を駆使し、気候変動や環境問題など世界が直面するまったなしの問題に S　さんは果敢に挑んでいくのでしょう。今後の活躍が楽しみです。

Tokyo Kasei Press なでしこ　Vol. 91 再掲